ふりがな　　やすかわ　はじめ

氏　名　　**安川　一**

1.　学歴

1982 年 3 月　埼玉大学教養学部教養学科卒業
1982 年 4 月　一橋大学大学院社会学研究科修士課程入学
1984 年 3 月　同課程修了
1984 年 4 月　一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程進学
1987 年 3 月　同課程単位取得満期退学

2.　職歴・研究歴

1987 年 4 月　亜細亜大学経済学部専任講師
1990 年 4 月　亜細亜大学経済学部助教授
1994 年 4 月　亜細亜大学国際関係学部助教授に配置替え
1996 年 4 月　一橋大学社会学部助教授
1997 年 4 月　一橋大学大学院社会学研究科助教授に配置替え
2002 年 4 月　一橋大学大学院社会学研究科教授

3.　学内教育活動

（A）主な担当講義名

（a）学部学生向け

社会心理学Ⅰ（社会的分野）、コミュニケーション論、等

（b）大学院

社会心理学、相互行為論、等

（B）ゼミナール

ゼミナール（３年）、ゼミナール（４年）、大学院演習

4.　主な研究テーマ

ミュージアム来館者経験のヴィジュアル・スタディ
動くイメージと身体感覚：ダンスへの非表象的アプローチ
イヌと居ぬということ：異種共棲のミクロ社会学

5.　研究活動

（A）業績

（a）著書・編著

『感情の社会学：エモーション・コンシャスな時代』（共著：岡原正幸・山田昌弘・安川　一・石川准）世界思想社, 1997.【「“感情する”秩序：当惑と相互行為秩序」139-174, 等】

『メディアコミュニケーション：情報交流の社会学』（共著：川崎賢一・往住彰文・川浦康至・高木晴夫・遠藤薫・橋爪大三郎・安川　一）富士通経営研修所, 1994.【「コンピュータとともにいるところ：体験的コンピューティング考」171-197, 等】

『メディアの現在形』（共著：香内三郎・山本武利・林 利隆・田村穣生・真鍋一史・古賀 豊・花田達朗・広瀬英彦・小玉美意子・安川 一・吉見俊哉）新曜社, 1993.【「マンガの情景：ヴィジュアルの循環」 274-307, 等】

『ゴフマン世界の再構成：共在の技法と秩序』（編著）世界思想社, 1991.【「〈共在〉の解剖学：相互行為の経験構成」1-31,「〈共在〉というポルノグラフィ：公共場面のジェンダー構造」185-210, 等】

『ジェンダーの社会学：女たち／男たちの世界』（共著：江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川　一・伊藤るり）新曜社, 1989.【「女性労働の現在：日本の場合／女性労働の位置：パートタイム労働をめぐって」147-158,「感性リアリティとジェンダー」195-232,「社会学と『女性』」53,「男女雇用機会均等法と女性労働のゆくえ」165, 等】

『現代メディア論』（共著：香内三郎・山本武利・岩倉誠一・田宮　武・後藤和彦・川井良介・安川　一）新曜社, 1987.【「パーソナルなメディア空間：音楽, マンガ, 若者文化」248-285, 等】

（b）論文

「視的経験を社会学するために」『社会学評論』60(1): 57-72, 2009.

「ヴィジュアル・メソッドによる美術館来館者研究」『第 39 回三菱財団事業報告書 平成 20(2008)年度』, 475-477, 2009.

「身体－自己像の視覚社会学的研究：視覚経験と社会的世界の再帰的編制をめぐって」（共著：安川　一, 田邊尚子, 上村淳志）2005-07 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2008.

「過去に眼差す：その社会学的考察のために」森村敏己(編)『視覚表象と集合的記憶：歴史・現在・戦争』旬報社, 49-78, 2006.

「身体の視覚的編制：視覚経験と社会的世界の再帰的編制をめぐるミクロ社会学的研究」（共著：安川　一, 田邊尚子）2003-04 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2005.

「オンライン・セラピー：メディア媒介的な社会的サービス活動の性格と課題」（共著：安川　一, 安藤太郎, 2000 年度財団法人大川情報通信基金研究助成報告書, 2002.

「視覚メディアにおけるジェンダー・ディスプレイのミクロ社会学的分析」（共著：安川　一, 前田泰樹, 杉山由佳）1999-01 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2002.

「生活世界の情報化」（共著：安川　一・杉山あかし）児島和人(編)『講座社会学 ８ 社会情報』東京大学出版会, 73-115, 1999.

"College cheating in Japan and the United States." (Coauthored: Diekhoff, George M., Labeff, Emily E., Shinohara, Kohei, & Yasukawa, Hajime) Research in Higher Education 40(3): 343-353, 1999.

「コンピュータ・ネットワークによる異文化理解の促進可能性に関する社会心理学的研究：電子メディア環境が異文化間コミュニケーションにもたらすもの」（共著：栗原　孝, 遠藤　薫, 村田光二, 太田恵子, 安川　一, 藤島喜嗣）『電気通信普及財団　研究調査報告書』13-1: 503-514, 1999.

「現代社会におけるコンピュータ・ネットワークの位置と機能に関する実証的研究：ソーシャル・サポートの実態と可能性　国際比較研究」（共著：安川　一, 干川剛史, 遠藤　薫, 廣瀬克哉, 水川喜文, 安藤太郎）『電気通信普及財団　研究調査報告書』13-1: 524-535, 1999.

「TV 視聴経験の『視聴覚性それ自体』における構成：TVCF／TV 番組経験の相互行為論的分析」（共著：安川一・上谷香陽・高山啓子）『平成 10(1998)年度（第 32 次）助成研究集（要旨）』（財団法人吉田秀雄記念事業財団）121-132, 1999.

「ヴィジュアル文化の読み解き方：ヴィジュアル表現の社会学へ（下）」『言語』27(10): 10-15, 1998.

「“わかりやすさ”の陥穽：ヴィジュアル表現の社会学へ（中）」『言語』27(9): 10-15, 1998.
「“ヴィジュアル”の“わかりづらさ”：ヴィジュアル表現の社会学へ（上）」『言語』27(8): 10-16, 1998.
「サイバースペースへのアプローチ：CMC をどう思考するか」『一橋論叢』120(4): 586-598, 1998.
「現代社会におけるコンピュータ・ネットワークの位置と機能に関する実証的研究」（共著：安川　一, 遠藤　薫, 干川剛史, 栗原　孝, 廣瀬克哉, 村田光二, 水川喜文）『電気通信普及財団　研究調査報告書』12: 334-343, 1998.
「ネットワーク」『マス・コミュニケーション研究』50:72-79, 1997.
「ヴィデオゲーム経験をどう捉えるか：文献調査から」佐藤　毅(代表)『情報化と大衆文化』1991-94 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 77-105, 1995.
「若者／子どもとメディア：その“問題性”をめぐって」田村穣生・鶴木　眞(編)『メディアと情報のマトリックス』弘文堂, 289-296, 1995.
「マンガの語られ方：“ヴィジュアル”をめぐる困惑」林　進(編)『メディア社会の現在』学文社, 93-109, 1994.
「コンピュータによる『書く／考える』：ワード・プロセッシング、データベース、思考」『現代のエスプリ 319 コンピュータ文化の現在』至文堂, 147-160, 1994.
「ビデオゲーム経験の構造：インタラクションという現実構成」『現代のエスプリ 312 情報化と大衆文化：ビデオゲームとカラオケ』至文堂, 25-43, 1993.
「インタラクション・プロトタイプとしてのビデオゲーム経験」『季刊子ども学』1: 60-71, 1993.
「社会的相互行為」（共著：佐藤 毅・安川　一）福祉士養成講座編集委員会(編)『改訂社会福祉士養成講座 12 社会学』中央法規, 16-27, 1992.
「ビデオゲームはなぜ面白いのか：経験解体の快楽」アクロス編集室(編)『ポップ・コミュニケーション全書』ＰＡＲＣＯ出版, 144-177, 1992.
「会話と自己：相互行為のフレイム分析　ノート」『亜細亜大学国際関係紀要』1(1): 257-285, 1991.
「ジェンダー感性のリアリティ構成：E.ゴッフマンにみるジェンダーのテーマ」『亜細亜大学経済学紀要』15(1): 45-73, 1990.
「役割距離」「自己呈示」佐藤慶幸・船津　衛(編)『社会学の展開』北樹出版, 71-83, 1989.
「リアリティの外見：相互行為とアイデンティティのフレイム」『亜細亜大学経済学紀要』13(3): 85-116, 1989.
「親子の相互行為と状況の定義の相互性」佐藤　毅(代表)『相互行為としての社会化：叱り方・叱られ方の実態研究』1987-88 年度科学研究費補助金研究成果報告書, 53-58, 1989.
「相互行為の演技と儀礼：ゴッフマンの初期著作を素材として」『亜細亜大学経済学紀要』13(1): 63-99, 1988.
「George H. Mead 社会理論の展開：パースペクティヴと状況の理論に向けて」博士後期課程単位取得論文（一橋大学）, 1987.
「『社会行動主義』と G.H.ミード・II：G.H.ミード『行為の哲学』に向けて（その２ｂ）」『一橋研究』11(4): 155-169, 1987.
「外見と自己：“状況の定義”をめぐって」山岸　健（編著）『日常生活と社会理論：社会学の視点』慶應通信, 87-111, 1987.
「『社会行動主義』と G.H.ミード・Ｉ：G.H.ミード『行為の哲学』に向けて（その２）」『一橋研究』11(2): 105-132, 1986.
「『心的なものの定義』：主観性をめぐって：G.H.ミード『行為の哲学』に向けて（その１）」『一橋研究』11(1): 83-107, 1986.
「G.H.ミードの社会理論におけるホワイトヘッド自然哲学：パースペクティヴの客観性をめぐって」『一橋論叢』93(5): 689-708, 1985.
「G.H.ミード『社会心理学』の性格と課題：社会的実践と社会心理学」『社会学評論』36(2): 217-231, 1985.

「G.H.Mead における行為とパースペクティヴ：Self 概念の再構成に向けて」『一橋研究』9(1): 119-135, 1984.
「行為・自己・パースペクティヴ： George H. Mead 社会理論序説」修士論文（一橋大学）, 1984.

（c）翻訳

ジョシュア・メイロウィッツ『場所感の喪失：電子メディアが社会的行動に及ぼす影響（上）』（共訳：安川　一, 高山啓子, 上谷香陽）新曜社, 2003.

（d）その他

「役割理論」「ミード George Herbert Mead」尾関周二ほか(編)『哲学中辞典』知泉書房, 2016.
「ミード, G. H.」「メイロウィッツ, ジョシュア」大澤真幸ほか(編)『現代社会学事典』弘文堂, 2012.
「選択：別の世界を選べない」『ＨＱ』12: 24-25, 2006.
「ゴッフマン, E.」「ミード, G. H.」「クーリー, C. H.」「一般化された他者」「テレビゲーム」北川高嗣ほか(編)『情報学事典』弘文堂, 2002.
「書評：片桐雅隆『自己と「語り」の社会学：構築主義的展開』」『読書人』2375(2001.2.23), 2001.
「書評：磯部卓三『道徳意識と規範の逆説』」『社会学評論』51(1):153-154, 2000.
「インターネット」「コンピュータ犯罪」「コンピュータ・リテラシー」「テレビゲーム」「電子共同体」「パソコン通信」「世論」庄司洋子ほか(編)『福祉社会事典』弘文堂, 1999.
「書評：折橋徹彦・杉田正樹『うその自己分析：虚感の時代を生きる：』」『週刊読書人』2304(1999.10.1), 1999.
「コンピュータ・ネットワークは人間関係に何をもたらすか：コンピュータ・コミュニケーションとヒューマン・コミュニケーション」『第３５期　一橋フォーラム２１』【一橋フォーラム 21：21 世紀とグローバル・イシュー,1997.07.22, 講演記録】, 1998.
「ゴフマン『行為と演技：日常生活における自己呈示』」「ゴフマン『スティグマの社会学』」「ゴフマン『出会い：相互行為の社会学』」「ゴフマン『集まりの構造』」「ゴフマン『アサイラム』」見田宗介ほか(編)『社会学文献事典』弘文堂, 1998.
「ビデオゲームがシミュレイトするもの」『言語』27(3):122-123, 1998.
「ジェンダーへの眼差しとメディア」『言語』27(9):112-113, 1998.
「テレビゲーム」池上良正ほか(編)『日本民俗宗教辞典』東京堂出版, 1998.
「ＴＶニュースの理解」『言語』26(3):118-119, 1997.
「GAME・WATCH／『たまごっち』がこんなにハヤる理由、が語られない理由」『日経ゲームビート（日経クリック４月号臨時増刊）』1:104, 1997.
「家族についてのあたりまえ」『言語』26(10):116-117, 1997.
「セクシュアリティ」「猥褻」「ポルノグラフィー」比較家族史学会(編)『事典　家族』弘文堂, 1996.
「書評:片桐雅隆『プライバシーの社会学：相互行為・自己・プライバシー：』」『週刊読書人』2130(1996.4.12), 1996.
「電子メディアはコミュニケーションを変えたか」『言語』25(6):12-17, 1996.
「社会心理学：感情ルールとサイバースペース」『別冊宝島 279 わかりたいあなたのための心理学・入門』宝島社, 221-222, 1996.
「書評:正村俊之『秘密と恥：日本社会のコミュニケーション構造：』」『週刊読書人』2106(1995.10.20), 1995.
「夢は誰の夢か：マルチメディア言説のリアリティ」『ＡＵＲＡ』（フジテレビ編成局調査部）105:10-15, 1994.
「書評: 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸『メディアとしての電話』」『週刊読書人』1968(1993.1.25), 1993.
「アイとミー」「自己相互作用」「社会化過剰的人間観」「象徴的相互行為」「プレイ／ゲーム」「有意味シンボル」「ミード, G. H.」「ロング, Ｄ．Ｈ.」森岡清美・塩原　勉・本間康平（編集代表）『新社会学辞典』有斐閣, 1993.
「ヴィデオ・ゲームのミクロ・ワールド：『人ーメディア・インタラクション』と経験構成」平成４(1992)年度文

部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」第２群・総括班共催シンポジウム記録集, 1-12, 1993.
「人ーメディア・インタラクションの現実感 : ヴィデオ・ゲーム経験のもたらすもの」『世界思想』（世界思想社）20(1993 春): 57-60, 1993.
「書評：渡辺恒夫『迷宮のエロスと文明：激動するジェンダー・自我・世界観の心理学：』」『週刊読書人』1916(1992.1.13), 1992.
「マンガ」松崎巌(監修)・西村俊一(編集代表)『国際教育事典』アルク, 1991.
「基本的民主化」「新人類」「スケープゴート」「中間文化」「パフォーマンス」「ミーハー」「モラトリアム人間」「ＵＦＯ」石川弘義ほか(編)『大衆文化事典』弘文堂, 1991.
「書評：伊奈正人『ミルズ大衆論の方法とスタイル』」『週刊読書人』1887(1991.6.17), 1991.
「キャラクター商品＆ブランド商品」『青年心理』79:42-44, 1990.
「ビデオ・ゲーム：ファミコン現象とメディア空間」『青年心理』67:36-41, 1988.
「アイ／ミー」「一般化された他者」「ミード（G. H.）」見田宗介・栗原彬・田中義久(編)『社会学事典』弘文堂, 1988.
「メディアの中のアニメ」『リサーチ・スペシャル：フジテレビ調査報告書〔'87・1～12〕』フジテレビ編成局調査部, 231-251, 1988.
「書評 : 後藤将之『ジョージ・ハーバート・ミード : コミュニケーションと社会心理学の理論 : 』」『週間読書人』1711(1987.12.7.), 1987.
「ジェンダーの社会理論に向けて：『性役割』論への一考察」『ジェンダー・レヴュー』2:43-58, 1986.

（Ｂ）最近の研究活動（1996 年以降）

（ａ）国内外学会発表

「視的経験の表象：データベース・ベースの調査デザイン」第 60 回関東社会学会大会, 2012.
「生活世界の視覚的編制：自叙的イメージを読む」日本社会学会第 81 回大会, 2008.
「美術館の“観る”を表象する（２）：画像データベースによる記述と提示」日本社会学会第 80 回大会, 2007.
「美術館の"観る"を表象する：視覚社会学的試み」日本社会学会第 79 回大会, 2006.
「"自分を見る"の周辺：自叙的イメージ法と視覚的世界」日本社会学会第 78 回大会, 2005.
「写真と社会学："社会学する"ということ」関東社会学会第 53 回大会, 2005.
「自分自身をどう見ているか：自叙的イメージ研究とその試行」日本社会学会第 77 回大会, 2004.
「視覚経験の社会学：映像データベースの援用」日本社会学会第 73 回大会, 2000.
「視覚メディア経験の社会学に向けて：テレビＣＭ経験の相互行為論的分析（１）」日本社会学会第 72 回大会, 1999.
「ＣＭＣ経験と社会学的リアリティ：conceptual proposal」関東社会学会第 47 回大会, 1999.
「CyberSpace で"いる／行為する"ということ： frame analysis の re-framing」関東社会学会第 44 回大会, 1996.
「パソコンの『日常化』が意味するもの」情報通信学会第 13 回大会, 1996.

（ｂ）国内研究プロジェクト

「分野間比較を通した質的研究アプローチの再検討」(研究分担者), 日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」領域開拓プログラム, 2020-23.
「美的経験のヴィジュアル・スタディ：主観性の社会学に向けて」」(研究代表者), 科学研究費補助金(基盤研究Ｃ), 2013-16.
「美術館経験のヴィジュアル・スタディ：社会的空間の視覚的編制をめぐって」(研究代表者), 科学研究費補助

金(基盤研究Ｃ), 2009-12.

「ヴィジュアル・メソッドによる美術館来館者研究」(研究代表者), 財団法人三菱財団, 2007-08.

「身体－自己像の視覚社会学的研究：視覚経験と社会的世界の再帰的編成をめぐって」(研究代表者), 科学研究費補助金(基盤研究Ｃ), 2005-08.

「戦争と集合的記憶」(研究分担者), 一橋大学において経費配分を得て実施した研究プロジェクト, 2004-07.

「身体の視覚的編制：視覚経験と社会的世界の再帰的編制をめぐるミクロ社会学的研究」(研究代表者), 科学研究費補助金(基盤研究Ｃ), 2003-05.

「オンライン・セラピー：メディア媒介的な社会的サービス活動の性格と課題」(研究代表者), 財団法人大川情報通信基金, 2000-01.

「視覚メディアにおけるジェンダー・ディスプレイのミクロ社会学的分析」(研究代表者), 科学研究費補助金(基盤研究Ｃ), 1999-02.

「TV 視聴経験の『視聴覚性それ自体』における構成：TVCF／TV 番組経験の相互行為論的分析」(研究代表者), 財団法人吉田秀雄記念事業財団, 1998-99

「現代社会におけるコンピュータ・ネットワークの位置と機能に関する実証的研究：ソーシャル・サポートの実態と可能性：国際比較」(研究代表者), 電気通信普及財団, 1997-98.

「コンピュータ・ネットワークによる異文化理解の促進可能性に関する社会心理学的研究：電子メディア環境が異文化間コミュニケーションにもたらすもの」(研究分担者), 電気通信普及財団, 1997-98.

「現代社会におけるコンピュータ・ネットワークの位置と機能に関する実証的研究」(研究代表者), 電気通信普及財団, 1996-97.

「現代社会におけるコンピュータ・ネットワークの位置づけに関する実証的研究」(研究代表者), 日本経済研究奨励財団, 1996-97.

「視覚メディアの呈示スタイルとその受容――ＴＶニュース表現のミクロ社会学的研究――」科学研究費補助金(奨励研究Ａ),1995−96.

（c）国際研究プロジェクト

（d）研究会、シンポ等のオーガナイズ

・国際シンポジウム「人文学・社会科学の危機とインパクト」2018.

・先端課題研究 18「人文学・社会科学の社会的インパクト」2018-20.

→ 一橋大学政策フォーラム「人文学・社会科学におけるインパクトとは何か？」2019.

・先端課題研究 16「human/non-human interface の社会・文化的研究」2016-19.

→ 国際ワークショップ「アフター・サイボーグ」2018.

・先端課題研究 02「視覚表象と文化的記憶」2002-05.

→ 学内共同研究プロジェクト「戦争と集合的記憶」2004-07.

6. 学内行政

（A）役員・部局長・評議員等

役員補佐（学生担当）(2010.12-2012.11)

評議員(2014.04-2016.03)

研究科長・学部長(2016.12-2018.11)

（B）学内委員会

学生委員会委員、学部教育専門委員会委員、情報化統括本部 CIO 会議委員、等々

（C）課外活動顧問

劇団コギト顧問

7. 学外活動

（A）他大学非常勤講師等

中央大学文学部社会情報学専攻兼任講師、等々

（B）所属学会および学術活動

日本社会学会、関東社会学会、日本マスコミュニケーション学会、International Visual Sociology Association、等々

（C）公開講座・市民講座

社会学部連続市民講座(2011)、等々

（D）高校生向け出張講義・模擬講義

（E）その他（公的機関・各種団体・民間企業等における講演等）

一橋フォーラム 21(1997)、等々